

繪本豐臣勲功記

三編

六





吾位房為權美須見信長

属波阜帰城

加藤福海行桐勤勞長溪

属之士出姓



繪本豊臣

勲功記 二編卷之六

江戸

八功舎 徳水刪補

浅井家絶好謀校設信長属信長退去

大河と陸小成さんとを色バ必不崩る不あり。室小江別小谷は  
城に浅井備前守長政ハ織田信長との縁者お色とも去来兼  
率の諍論より。心中怨ととけやる。両家の間親しうらず。御く不使  
とありたるが遠道信長上洛ありて。不意小越前へ進發せし久以  
下野守久政大小怒上子息備前守長政をたため一族良家を  
味集め声烈ましく詔けるや。信長先年の義納ふそむき。遠方  
へ一應の報越もわく。朝倉退治小出馬せし事。言詔小絶せし表  
裏あり。猶小耳身や霞雨翻雲やぐて浅井を攻ん事。猶小怒く

豊日言三卷

明あり先たる向も人を制し。後時ハ制せらる。早く絶好は  
 新とて速朝倉義景を相扶けて。父祖の契約を守り下。と怒  
 氣凛々と謂ふ。諸士も信長の不信を懼る。今河内當理と  
 同トる。遠藤喜右衛門進之出吏ハ時小縁なきこと。今更後悔論を  
 する。先年小縁ハ佐和山小縁ハ信長を段扱へしと重し。時河  
 内父系引ましまさむ。此期小及びて絶交さんと決して河内用小縁  
 せらる。殊小信長今ハ天下の權を掌り。畿内五箇國兵洗尾張  
 之別格別を以若狭之邊の國を吹聴け。勢威既小強大し。と  
 向ふ小款なくハ當家船倉と合群をとも争せり。併ハいづれ若と遠  
 く河内縁者あり。只當家織田家と親まん。當家繁昌の基小朝  
 倉家と格別の誓約を以あり。今更河内軍ハ信長の私小たる

下小あり。天下は為小不禮を以。不義を戒む。いづれ將軍  
 上洛あり。と来小及ぶ。いと朝倉急動せり。河内意外の罪過  
 小いぞや。信長命令を蒙りて。義景の罪過を以。越前小出  
 馬せらる。事十分は道理を以。然るに當家絶好あり。船倉亦其據  
 せらる。天下一對して不忠あり。當家の滅亡遠く。早く思起を  
 休せらる。大將分の人を以。織田の陣中ハ河内勞あり。信長  
 多く歎びて。當家を重んず。但朝倉ハ義理達すと。おかしけれ  
 いら。信長義景和睦の義を河内料理あり。然るに。と詞を盡し  
 七隸め。備前も是理小服。同心の体あり。父の久政こそ  
 を周む。荀も武士の誓約ハ金銀も。固いとせむ。先代朝倉の  
 援助あり。我家全き得。と更義小背。船倉を







間道と  
列行く  
織田殿  
金ヶ崎と  
退陣す





金ヶ崎の  
殿たぐり駿ま木下  
奇兵と謀まく  
朝倉勢を  
駭おそす





義景の民  
世々多  
身重  
あふ  
垂りて此  
とて余  
羽と  
よじ  
て  
ひて  
せり

たさぐし。と注伸と所く義景喜悅し。然もあふべき事ありたり。然ら  
先陣と定むし。とて朝倉式部丞景鏡同中務少輔景恒小波九  
身景湯黒坂備中守と相副らき。一萬五千余騎して先陣小波九  
義景景自の二万餘騎を引率し。後陣をうけて急をせり。先陣既  
敷賀地小入り。乍候と走て窺しむる小波九日暮て黒白も知れど  
炬火燦火と見えとせ。織田勢とめ小波九もせど。金ヶ崎の城中  
城外左右の山麓小陣と張旗當標を影しく。勅(ひ)と注伸せし  
る。景恒備大小騎を。若び十余人を伴ひ。得と密子を見決む  
るに。細の若小遠とされ。諸を信長令りし。退去せざる。と覺へり。  
今宵の遠小陣と構。明天早朝より推進。用城の恥を雪んとて。  
金ヶ崎より十町をり。遠所の方小野陣とせり。義景も遠注伸し

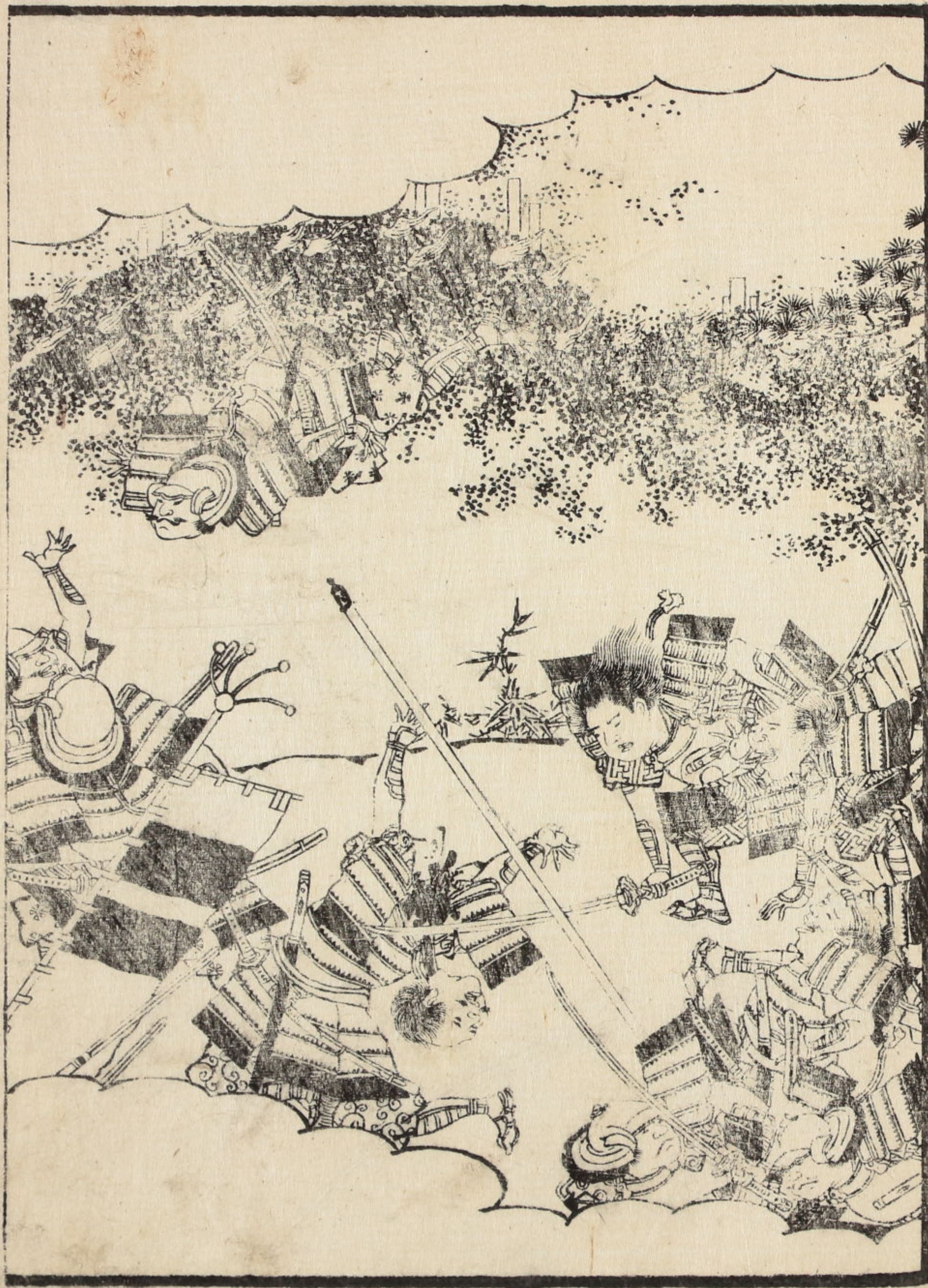
軍ハ明日こそ宜くめと野陣と張く。休息せり。先陣後陣の  
その中間十四五町小過ざりし。實小木下ヶ謀りし。不寸分遠とぬ  
事ぞ是神小通せし。秀吉みんぬ。朝倉勢の二万五千。いよく軍  
を明日は事と。心と定めて野陣なり。甲夜のかど。急りき。陣  
厳しく守りつ。とども。夜半と過る刻頃。將軍も小倦来り。と  
眠氣筋をも強小ことなり。今朝より十有余里。おひと。山坡の難  
不小草叶々。世満をう。頃へ。善悪も知れ。熟睡し。けり。木下  
初て形あらんと。不思議の明察を得。りし。自方の燦篝も甲夜の程  
を。燦小焚せ。り。夜深ま。小火光も。燭へ。番も。稍急を色。して  
陣勢出る。小より。朝倉方小も。大を。とて。諸こそ。敵を。のり。明日  
率退くと。か。が。こ。然ら。面。に。陣。拂。小。心。急。ま。て。取。段。と。小。出

かん軍のよもあらど。と心放して休息一たり。這時秀吉款陣をく  
 自身と澗溪を隔徹し。その宛責の時ありて自燃一千五百余騎  
 と之隊小率部正面左右を流あまを把持せ。麓の陣を去る小  
 亦出款陣をくする儘小暗号の烽をあらやるや。朝倉勢の野陣  
 せ。左右小伏する一千余人をまとい一時小甲夜の間より。使率小指南  
 構置する樹木の枝の炬火を一時小燃し起るれば死も殺弟の大軍  
 勢發起する宮小入て。漫々なるといふふみし。秀吉這火小威勢を流  
 と。喊をつらうを流と放蕘喚叫ぐ。攻起るや。朝倉勢の根根をこ  
 と。瓶鬼が虎穴小既する像く。濃き目擦り起出ま。四方へ管よりなか  
 咽白進むハ幾方あること小や。多銃の音喊の声天地も眩る計あり  
 織田の軍勢十万余と頼て怖氣のつひらうま。誰うハ是も小強向ふ

て防ぎんとし軍もかく。北谷穿て敗走するを景鏡系恒黒坂前  
 波踏止つて逃れり。自らの兵士を鼓起夜殿ハ僅の小勢ありぞ。  
 睨せ雨しく同士撃を好と呼をく。指揮をまきども。一万五千の軍  
 官軍が噪起する事なれば。いり小制をまきども。所管をまき後し親之始  
 敵我を先小と連引自方小武勇の景恒系鏡も。心は信小操得た。  
 後小退き脱とんま。後陣の方も惠劇夜殿や投しと思ううち小  
 忽地焼く火の光を流の音喊の声。小把りかく所ハ是も先陣の  
 諸將うち驚き。斯ハ一大事ぞ出来ま。救をまきんバあるべうを委し続け  
 と指揮し。一騎強小走出せ。逃將つひらう。使率軍大將も共小逃引  
 ことと。思過り今ハ是も命の外小惜きのみ。只連るこそ肝要な事。こ  
 馬武恙もなき好ら。棄。越く小ありて逃らう。木下秀吉こまを遣り

朝倉が陣小捨よりし。弓陰鳥銃を刀薙刀のひく小分兩させ。  
 原の陣不へ遠返しぬ。備まら義系が陣中少の船目こそ浅井と軍を  
 合せ一橋小織田勢を返殿小と惱さたふと心を放し更中小心  
 の体もかく。甲勢より休息せしむる所へ竹中半兵衛重治が五右衛門の  
 勇士と引率し義系が陣とく潜進木下が隊の暗号せしむる時  
 稍移りて並小入り。浪漢の色は傾く。合圍の烽火空高く再々  
 とく沖ると齋しく。攻起る声のそとまりし。ふまの暗号の時刻を  
 然も些時遅きよりとて。駿卒小指揮してこたも同く山々谷々  
 樹木の梢小結着おひる。炬火を一度小燈と焼起り。四五町が程と  
 照し連ひて其勢幾万ある。陣中も眼も瞑むをわたり陣中熟く  
 咽着し不へ喊をつらうて。責進られ。将卒とも小豫観より。腹小臆甲

着もあり。額小眩冒を當るもあり。天足地頭小散乱とる。得るや應  
 と。堀尾輝次賀喜山。稲田の勇士達。右小擡起た小羅汰せ。微塵小  
 かせと弛散らせ。暫時小免懸山とぞ墨む。魚住山。湯さんどの。種將  
 勇士あり。船が。思設ぬ事あり。なれば。漸く甲冑うち堅め。大將義系  
 の。陣へ。鳴く。弛きて。是の。お。小。自。防。の。うち。小。謀。叛。人。の。出。来。し  
 ろ。る。べ。君。少。小。程。避。玉。と。ひ。も。了。ら。ぬ。目。下。教。養。は。大。軍。山。城  
 小。推。し。を。来。る。体。な。れ。ば。備。へ。織。田。勢。開。道。より。自。軍。の。横。際。と。致。ふ  
 ろ。ん。呼。い。ふ。と。防。ぐ。ん。と。陣。中。鼎。の。沸。ぐ。像。く。千。饌。方。倒。せ。し。う  
 ろ。義。累。素。より。事。小。臨。と。稔。り。た。ぬ。性。質。な。ま。甲。冑。さ。も。被。謀  
 せ。と。素。肌。の。ま。は。く。馬。小。踏。り。従。者。も。四。五。人。漸。々。率。便。し。陣。背。は  
 口。と。遁。を。出。諸。を。持。て。奔。走。せ。し。く。大。將。在。り。ま。さ。ぬ。と。目。を。備。こ。そ



木下の殿駈ふ  
加藤福島  
庁相初戦ふ

見聞言二多巻五二



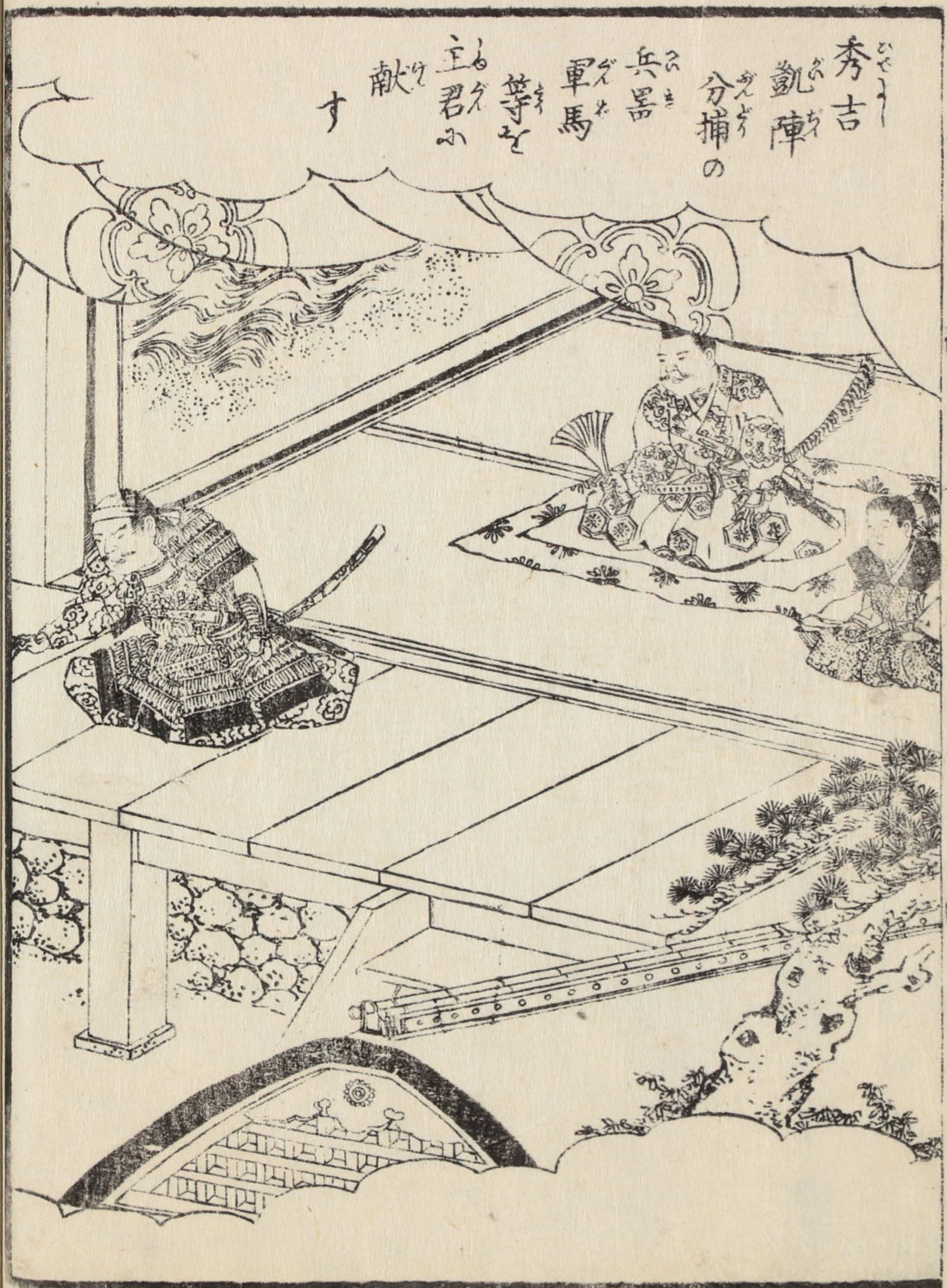
しうども是を破りて難なく帰洛し。信長の所座不本泰上とて軍に  
 次々と書状しうるが。後井小合陣せし一揆軍多く石山の門徒ありし。  
 信長所しめきこく心申た右不本願寺と如きもくは性くハ天下  
 の憂とありぬべし。時節もあらばおがされり。茲小殿致さく之残し  
 置れし。藤吉所が二千余騎のいまど歸來らざるを只管心小光踏せ  
 らし遠が安否を知らんがため。坂井常田此西將小二千餘騎を當  
 制られ中途へ迎へ小出さきさるが。江別尾奥川にて本下が帰洛小出  
 合多き。利家政尚帰陣と祝し。且信長の銳意を演り秀吉重  
 治落涙をらまて君の恩志を感佩し。坂井常田小ら連ごら糸都  
 小入り舟便小信長の所着不泰上とられ君の宛亡人の蘇生さるや  
 小おがさき軍に次々と問せさる小。秀吉膜拜云とまらく朝倉方の

是陣より糸道景境を追敷し。渠依が歩捨ゆひし。甲冑益々益々  
 捕り。漸に小持泰つらぬと。馬古上香院、之古板と外  
 品々入陣せし。信長愕然とて感心のあまり。霎時所詞もなりし  
 が思ひを膝を摺進さひ秀吉のよと掌て新量大事の退路を。  
 こ二千餘の小勢小して。之万五千の大敵せうち敗るるのそらもど自  
 方の益士を一個も傷めを贖かなくの分取せし事。古今未だ有る言  
 功とのふし。古往今來進む軍小小勢せりつて大敵を破りし例あり  
 とのこも退く軍小新さる。勝利を得らる者へり。後小藤吉所は  
 外はまこと末世といふともよもあるは。希代不思議の名とく。と感嘆と  
 きり多し。秀吉の面目小割り再洋せり。秀吉言さく。遠運の勝  
 駁小勝利を得しこと全く小居が功なり。是を主君の所寄運と約會





秀吉  
凱陣  
分捕の  
兵器  
軍馬  
等を  
主君に  
献す



家の滅ぶべし。時算小槻合あつと出合いの藤吉郎ふじやうが遠化とんげとふと  
 志し壯さう一いつ奉ほう見けんしなどなに織田殿おだのをなく頼母たのぼくおがしめし。再び軍の  
 進退しんたいを問とせしあふ小こ隨ずいへて是非せいひ分明めいめい小こ就じゆ連れん也なり。所帰國しよきこくの後のちは要領ようりやう  
 ありとて若列わかしやうの法侍ほふしやうの人質にんしやうを提諸城ていしよじやうへ自軍じきんの兵士へいしを籠置かごぢ歸軍ききんを  
 速小助すみせきすけめまぬらして信長のぶなが實小もと同トどうとたすひ然しから六む若狭わかさの諸侍士しよしやうし  
 より人質にんしやうを請取ひきとりて。丹羽五郎にわごろうた東あづまの明智十兵衛あちめじゆうべゑの遠とほされ依よ植え  
 の粟屋越中あはやも然しか川の松宮玄蕃まつかみやん元もと字な松まつの遠見とほけん後のち河かを名辨なへんの  
 然しか大膳おほのぜんを外武藤ぐわいぶとう上かみ野原のの寺井てらゐ源げんた源げんへ依よ悉しつく人質にんしやうを出だ  
 せしより丹羽にわ昭あ智ちあまを石具いしぐ。都みやこ跡あと小こ帰かへて志し壯さう一いつ信長のぶながを  
 せしむ。悦よろこむを先ま達たつ上かみの雁守かりもりを定め重おもをべしとてまづ宇佐山  
 浦うら生なま郡ぐん八幡やちまの山やまをいふ。少すくの森もりに之これた米こめの尉ゑい可成かじやう。水原みづはらの城じやう野洲のしゆの依よ久ひさ間ま有ある尉ゑい

信盛のぶもり長光ながみつ寺てら武ぶ城じやうの城じやう少すく柴田しばた権けん六む郎らう勝家かつや安土山あづちやま少すく中川なかつがわた馬うま丞じやう  
 同どう八はち郎らうた馬うまを守置まもりおき。儲たくらも長なが深ふか城じやうをさす。先ま年とし本もと下した友吉ともきち郎らう  
 將軍家しやうぐんやより彈たま丸まるせしむ。遠とほ遣ぢ新あらた小こ入府いりふへ城じやうを堅固けんこ小こも固こめ  
 衆地しゆぢの民たみを撫育ぶよくせしむ。浅井あさいを雁守かりもり目めの守まもり。兵へい治ぢより京都きやうとへ  
 通とほ路ぢを自由じゆう多たらしむ。今いませよより秀吉ひでよし君恩きみおんを謝あやまりてさす。今いま  
 速小長すみせきなが深ふかへ羅城らじやうを從したがう。固こ小こ志しを護まもりぬ。次つぎ小こ柴田しばた森もり佑たすけ久ひさ間ま  
 中川なかつがわ等の諸將しよしやうもあつく。備び城じやうくくへ馳かけり。信のぶく浅井あさい久ひさ政まさ又また  
 子この謀まごりし事ことも成なり。憾がん念ねん小こ思しをいひとも今いま更さら悔かへとも詮せん  
 ぬれば再び計義けいぎを定さだめり。信長のぶながの帰國きこくを殿とのと其その分ぶん部ぶへ  
 西にし之日のひ踏ふ次つぎ小こ理り休やすむとひとどもも法ほふ治ぢ掌ててなりし。長なが政まさ急いそぎ  
 思案しあんあり。信長のぶなが京都きやうと小こ道みち尚なほさること。是これ壁かべの形かたちを朝あさ倉くら方かたと申まをす

合不意小濃別攻阜へ推進城を一時小攻臨し其勢をぬきしと  
地小上落ししるん少の信長いふ小極くも拒抗小方御ありてと  
と決し裁者(飛術)を馳く加獲らひる小義累これ小同意せざれば長  
政大小酒とといども御作きぞ休小る。備信長の本下が勅めの如く行  
政と定め五月十九日小系都と出馬し。臨次とありて赤せとあひ濃別  
當て降らせり

長信房為援兼復親信長 属攻阜降城

莠草その根を遺を時ハ再び稲田に害とあり。茲小先本織田  
信長小惱まきまきころ。六角入道兼復父子ハ石部の城小隠住い  
小もろくとい南と西迄さるやと謀まとも。信長の威勢日小随ひ月  
小應どく廣大るる由へ勿く敵討ありふじ。と時并を見合をありし小

遠達浅井家信長と好む絶断帰路小待信敵人と謀る事と所  
出ししに機舎なきに遠方小も一軍して試むるとかりひ依り木家恩顧  
の武士軍と遠山形林より併集め難江の城愛智小對濃守。市原意の  
々氏と信し集めて信長の帰路を毀んと計りたる。茲小勢別朝明於杉  
谷圓通寺に信長善信房致潤といふ者あり心飽まを策勇小して武  
藝を好むとが中も殊小島院を熱練せし。がよび兼復小者くら  
をれ野洲川の河原へ出張し信長の来るを待りけり。然れど小信長へを  
江路小入るも切急を玉とぞ。静小馬とてせらる野洲の河原小款あり  
と懸隊の陣より信伴しとれば信長冷笑ひと多ひ定めて野武士の一揆  
をへし。何量の事とらひさん。跪首らして通るし。と指揮せらる小依り  
益田板井池田の勇將達正魁小進んて駿卒を懸まじ。六角勢の正軍

一面も捲りと斬て投割破激塵小粒起りて大勢ありとていふ  
 軍でうこま不及死。四方八面小連放り。六角兼頼大不怒り自勢を  
 統めて撃撃て蕞ると織田家小名を得。勇士達ハ一騎當千あり  
 々々バ怖氣のつひう江別勢と瞬くをまに斬断を志すこめ一騎  
 半卒透了軍もあまバこそ。慥たる敗走。たる小より兼頼心を怪しと  
 少とも向ふ力のなうらまは。懸江の城へ逃入り。織田殿ハ強く軍を好  
 まざる勢を纏めて諸を固き。伊勢路小指らんと急ぐせとあふ威風儀小  
 凍々として四方も懸くたうらまは。彼枚岩の若住房が神小通せし炮  
 術の決晴あぶるも定まらむを。歎くへ自軍はあつに退起らむを  
 候。中間遙小延。まは。懸断と。つも筒を捲玄大將の体とよくくえ  
 る時。信長莞尔とうち笑ひ諸士の勇戦を賞觀せられ浅井。六角

ひとろ小あり。壘新と謀るとも。發りし。蟻蜂が。総車らんぬと小げ  
 玄歌と野畑の像く。睡せ玉ふ眼光ん人あふと見へ。ころり。懸る  
 小池田依云休と。渠們も素より。取ら小是らざる。や民軍の一揆なり。  
 怖る。つ見おのあらねども。佐々木ハ累代當國小ま。よく百姓を別  
 たり。遠慮の形。政企も一朝一夕の事。ま。あ。此。是。も。又。撃。て。蕞。  
 妨なさん。量。さ。し。唯。漸。要。心。お。く。ん。バ。あ。ら。む。と。蒲。生。賢。秀。を。案。内。者。と  
 して。困。道。と。う。せ。さ。る。へ。と。案。を。ま。し。う。信。長。も。つ。と。も。同。く。あ。り。直。地  
 小。用。野。の。蒲。生。へ。授。玉。つ。賢。秀。父。子。出。途。へ。種。々。答。應。な。し。ま。ぬ。ら。せ。懸。し。と  
 后。小。困。道。あり。千。種。越。と。導。余。を。并。も。此。を。種。越。とい。ふ。こ。ろ。げ。日。野。の  
 里。より。羽。田。津。畑。山。を。經。く。辨。別。あり。千。種。の。里。に。出。る。路。あり。山。嶺  
 不。して。谷。深。く。た。れ。し。通。せ。し。路。な。ま。は。深。淵。中。に。て。以。讀。む。と。蒲。生



且書し  
田舎



且書し  
田舎

が伊勢路の剛道を三平日子の秘せし誘はぐら。今日のためハ究竟なりと  
として案内しそすしに。然バ難くことを知るべき。然るに杉原の居居  
。ヤそのらん。大將信長と學滿。寧ろぬる子あ。そのの  
。後彼を計た計された子。右心と碑き。自ら軍多勢の中よてハ  
。款子をづく輝増。只我一個も親不意を沈視。撃んゆはと。姿  
。と雲して俄回勢の若後子。鰐淵ひら。日野の蒲生が道命子。十  
。種。敵子うると所。是こそ頼不。自居居の杉原よりハ。豪傑き。漢道  
。えり。本於根。れ岩角。ま。日。来。月。去。跡。熱。こ。ま。六。報。不。を。若。子。こ。ろ。び。と  
。も。親。當。ハ。む。ご。う。敵。軍。謀。らん。と。雀。躍。り。て。始。び。続。ち。秘。殺。の。名。流。授。抱。へ  
。千。種。頭。領。小。侍。侍。へ。方。僅。や。遅。と。周。不。復。かく。織。田。の。先。陣。次。身  
。どうち。隊。子。隊。仗。と。と。羊。腸。ひ。む。便。己。も。は。と。一。勢。く。推。さ。る。

△道々之  
信長居居  
が二義の後地  
中し馬より  
さう使居居  
うの筆は  
まきあそ  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四  
まの四

川津と春を待。長任。若く是と見。す。強。薬。小。二。院。九。め。是。や  
。遠。方。は。同。當。敵。信。長。小。こ。そ。と。候。ひ。極。腕。腹。の。あ。ろ。撃。抜。ん。と。火。蓋。之  
。裁。て。煙。と。費。つ。小。信。長。運。や。強。う。ん。候。ひ。惑。々。細。腕。の。袖。七。捲。り。て  
。身。不。當。ら。む。若。任。居。大。小。熱。腸。身。二。遭。流。七。稠。濃。て。敵。軍。は。九。八。外。れ  
。さう。織。田。勢。大。小。警。死。發。き。の。曲。者。を。捕。へ。ん。と。い。ふ。は。信。長。固。く。制。し  
。今。ハ。天。小。あ。る。も。計。を。棄。置。き。よ。と。宣。ひ。て。盾。と。も。か。が。さ。さ。を。結。く。馬。を。進。ま  
。せ。り。既。不。慮。上。と。う。ち。越。え。千。種。の。里。小。投。さ。へ。ハ。得。小。怪。き。若。任  
。房。も。此。態。と。見。て。舌。を。据。ひ。潜。隠。せ。て。逃。遁。す。遠。后。路。頭。小。一。款。の。妨  
。あ。ら。で。事。故。な。く。信。長。諸。將。を。照。候。し。玉。ひ。岐。阜。味。小。入。せ。た。れ。は。後。井  
。も。犯。を。小。御。さ。く。後。小。諸。君。を。過。し。り。る。也。  
。加。藤。福。嶋。川。相。動。勢。長。漢。属。之。士。出。陣。

力を以て人を服する者ハ心腹を以て小あらむ。力雖もさびやく。徳を以て  
 人と腹を以ては中心悦ぶ。誠小腹を以て實小。藤吉、秀吉ハ江州長  
 湊の城を以て。領分の百姓町人を帰服せしむるハ仁義を以て。一事も  
 なきも賞罰の令を以て。正しくは。驕奢を以て。これ儉約を以て。廉直を以て  
 名を以て。これバ。衆民の心。善想して。乳児の慈母を以て。遂に。これハ  
 後。戦國ながら。長瀬を以て。静謐にして。民を以て。業を以て。勵むこと。脩  
 り。齊家を以て。本とす。致慈の道。を以て。缺ざりし。ハ。自然と。豊饒安樂。を  
 以て。悦小。入る。秀吉。を以て。心とす。東地安穩。ありし。ゆへ。款國の間  
 者を以て。探り。或ハ。殘賊。漆瀨子の。潛穴を。穿んとす。加藤虎之助。福海  
 市松。行。相。助。作。之。人。を。致。率。首。と。す。以。以。緝。里。郎。巷。を。巡。檢。せ。し。め。  
 政。事。最。重。小。せ。し。し。ハ。長。湊。江。領。分。安。穩。し。て。所。不。平。の。不。な。く。衆

金堀列の牧  
 加藤主判  
 兼松平  
 後四下  
 賜書は  
 信長は  
 徳川は  
 此を  
 苗裔  
 武臣  
 代の  
 者不  
 徳川  
 加藤  
 中村  
 永福  
 吉川  
 西

民衆を以て戸を以て。用さむ。枕を以て。や。ハ。外。睦。せ。り。开。も。加。藤。虎。之。助。の。出。世。を  
 鞠。小。亦。下。秀。吉。が。母。を。以て。以。加。藤。が。父。を。以。て。從。者。あり。其。四。祖。を。穿。履。小。  
 大。織。冠。孫。足。小。出。う。江。邊。大。尾。魚。名。公。の。苗。裔。法。守。府。將。軍。利。仁。御。  
 の。後。亂。な。れ。も。久。く。民間。小。零。落。尾。別。愛。部。郡。中。村。小。住。し。其。家。非。師。  
 と。業。を。以。て。一。子。あり。儲。ま。く。福。海。市。松。ハ。加。藤。又。五。郎。助。の。後。身。  
 小。一。母。ハ。五。郎。助。が。叔。母。なる。由。ハ。太。岡。の。母。堂。も。又。孫。者。あり。父。ハ。中。村。小。住。伯。  
 せ。る。桶。屋。新。右。衛。門。と。し。る。者。少。く。三。代。以。希。東。之。河。の。竹。土。あり。しが。戦。國。の。習。  
 氣。非。ず。も。土。民。を。以。て。尾。列。小。住。一。桶。の。繩。結。く。活。計。と。せ。り。开。も。遠。市。松。が。  
 生長。尋。常。あり。た。二。女。の。事。あり。しが。搖。籃。小。さ。も。安。得。と。て。勝。を。索。り。て  
 去。つ。と。傳。り。こ。是。小。石。碓。を。控。居。し。が。その。碓。も。小。擊。巨。一。匍。匐。く。遊。び  
 一。と。う。や。五。六。の。長。間。より。大。膽。不。敵。なる。こと。ハ。妖。魔。鬼。神。も。目。小。遮。ら。ば。さ。り

福島  
市松  
幼雅  
怪力





ひしぐんを糧あり。早七歳小も成つるは親の膝下小置もいと同職  
 あり。桶を頼まば公ひさきをうらうらと小比べては杖小く肝た  
 かも十倍の強勇あり。あま小よりて主人も殊に寵愛あり。一年をうら  
 過し。秋年の夏多し。十六をうらの羽軍ありて非道の詞を詔着  
 して性貨短衣の市松をば。遊小彼者と喧嘩を做す。隣小あり。院  
 を追取十六小ある小量の肩へ會釋もひさを投つけし。又尖割吃とあり  
 一。二寸をうらの疵つれて血の流る。あは吐絶の如く。彼りの大小驚怖を  
 他殺よと叫ぶと市松も速く走り倚く。小され拳握り固眉間の  
 あらうを連捷小六七かど歩る。あへ家中の軍們走り来り。驚きあ  
 怒罵る。市松を幸く撃を負傷せし。抱てよく見ま。肩走よかと  
 傷きて殊小苦む。体ありし。小児の事といひ。好から。等閑小も涙さ

と。し。市松の原へいふ。いと問せ市松を。しも噪ぐ。渠奴面これ。奴  
 僕に。僕。自分の用事を。権。彌小。更し。つけ。ら。し。ごも。を。機。合。我。ら。の  
 主人の用。ゆ。て。是。小。慮。間。の。あ。う。り。さ。ば。我。ら。の。方。の。家。僕。小。邪。を。  
 殊。小。の。主。人。の。用。も。あ。り。と。い。ふ。を。渠。奴。面。理。能。を。あ。げ。を。を。法。小。を。を。  
 打。こ。も。一。我。ま。と。魚。刀。を。投。着。こ。も。が。微。口。の。疵。つ。れ。小。渠。奴。面。臆。病。未  
 練。小。く。他。殺。よ。と。詔。叫。び。狂。言。る。面。憎。ま。ま。が。遠。奉。小。く。五。六。種。布。し。る  
 多。で。あ。り。と。射。り。笑。ふ。を。家。内。の。軍。或。は。驚。死。或。は。呆。ま。小。児。小。似。合。ぬ。大。儀  
 う。の。捨。置。ま。と。噪。ぐ。機。會。う。ら。儀。回。敬。非。常。を。乳。明。を。巡。檢。奉。出  
 来。ら。ま。遠。休。を。う。て。市。松。み。ら。び。小。員。癖。の。者。を。召。使。て。奉。行。の。場  
 へ。擊。れ。ら。市。松。の。父。影。右。衛。門。の。こ。を。を。听。て。大。小。愕。き。い。な。は。せ。ん。と。歎。れ  
 る。を。縁。者。なる。五。郎。助。も。こ。も。小。う。も。集。あり。る。が。影。右。衛。門。を。耐。心。謂



市松  
朋輩の  
不信を  
罵怒  
喧嘩

やう。市松が母も本下殿の母公と親した縁者なまひ。こま小方便料理  
 まよと教指を聴て大小飲び五節助と同道して本下が母の許小至り。  
 新う結末を歎きさるが。本下が母こまを受諾孫助をゆつて使とわし。  
 文章細くと書記得別役城へ遣へるまは秀言まをこまを一監せられ孫  
 助小京属らるや。政事の道へ親睦をいそむ。依怙ある沙汰を為さ  
 るゆつて。全くとさる少くあらむや。然るを本下が内縁なりとて。非を理  
 小せんとおのりさる。條必の外は事小まんいう小母公の頼りなりとも。勝  
 づれ訴詔を貰さるべらんや。まして本下藤吉舟の町方の奉行さざれば。  
 猶更遠事料理と。目市松が一条の切案とる事小もあつてまよも一命  
 むの括るまじ。市松さるが八歳なまひいふ小も幼稚の事ありたり。贖封人  
 の死さるあらね。格別の事ハともあるまじ。まじさる事海なば市松を他

家へ出さむ大切小養育せよと。新右衛門小まが一所よ且又母公少の  
 此後とも遠般の事を執揚て命執せらるまよと。會上よとに属て中村  
 彌助を帰へるまよ。孫助直地小走房り。各一節と報とら。果て本  
 下が申せし如く。事程便小まを小ける。まよ。本下例役へ親近書を報  
 きさる時。新右衛門が父子とも呼名。細く市松を頼らさる小いさぬ元  
 人あつさる相親こまご成長をさるのあつて一臂をらん。心小飲び頼て作  
 申が許小憑倚て。軍法公術と學ををける。儲まよ。行相助取は。和源  
 氏信濃の國に任人まじ。父の何某儀別小まを。土波友家を大親儀  
 小仕ふ然る小頼儀。秋篠道之小整をきて。兵衛を虫奪なり。る。行相  
 某も寡人。助作切やして。父小まを母の慈育を蒙りて。山家小賤居  
 年一々。本下例役小任とら。を隣を巡見。响不圖。遠母子の清潔



